バンコク日本人学校への派遣を振り返って

光市立塩田小学校　教頭　内山　裕史
（平成 18 年度派遣　タイ国　バンコク日本人学校）

１．タイ国のこと

（１）国名、首都、公用語、宗教など

○国名など

・タイ王国（タイおうこく）　通称タイ（ประเทศไทย Prathet Thai）

・タイランドと称されるもことも多い。漢字で泰（タイ）と表記されることもある。

・公式の英語表記は、*The Kingdom of Thailand*、略して *Thailand*（タイランド）

○首都、通貨、人口など

・首都はバンコク都　東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟国

・通貨はバーツ

・人口 6,891 万人（2017 年、タイ国勢調査による）

○公用語　　タイ語

○民族

・タイ族 75%　華人 14%　その他マレー系　インド系　モン族　カレン族

※タイ北部には、「少数民族」もいる。

○宗教

・仏教（南方上座部仏教）95%　イスラム教４%　キリスト教、他にヒンドゥー教　シーク教　道教など

・王室を始め、タイ国内のほとんどは仏教徒で占められている。現在もタイ仏暦（仏滅紀元、タイ暦）が主に使用されている。上座部仏教徒の男子は一生に１回は出家するものとされている。

・南部三県のマレー系住民のほぼ全てがイスラム教徒である。

（２）地理と気候

タイ王国は、インドシナ半島のほぼ中央に位置している。メナム川（チャオプラヤ川）が南北に流れ、流域は広大な沖積平野を形成している。西と北にミャンマー、北東にラオス、東にカンボジア、南にマレーシアと国境を接している。

国土面積は、約 51 万 4,000 ㎢で、日本のおよそ役 1.4 倍の広さがある。そのうち 40％を農地が占めている。

気候は、全体としては熱帯モンスーン気候で、半島部は熱帯雨林気候となっている。１年を通して大変暑い。年平均気温は 28℃。モンスーンの影響を受け、季節は「暑季」「雨季」「乾季」の３つの季節がある。４月は「暑季」と言われ、一番暑く、真夏である。５月から 10 月は湿気が多く「雨季」と言われる。雨が多い季節であるが、日本の梅雨とは異なり、毎日１時間程度の激しいスコールがある。11 月から３月はほとんど雨が降らず「乾季」と言われる。12 月くらいがとても涼しく過ごしやすい。朝晩は、半袖では肌寒く感じる。

赴任した直後は「暑季」。そのあとは湿度も高く蒸し暑い「雨季」。日中の気温が、40℃近くの中で新しい生活。日差しも強い。暑さに慣れることに精一杯。さらには、室内は冷房が効きすぎていて、温度差にも体が慣れず、半年が経つぐらいまでは、体調を保つことに神経を使ったことを記憶している。

一緒に赴任した教員の中には、数日前まで日中の気温が０℃から３℃くらいの場所で生活していたが、いきなり 40℃の中での新生活がスタートした教員もいた。

「雨季」の猛烈なスコールは、町の至る所で一時的な洪水を引き起こした。道路も 30 ㎝以上水につかり、いつもの渋滞がさらにひどくなることもあった。

（３）日本とのつながり

タイ国に在留する日本人は、５万人とも６万人とも言われている。

約７千社の日本企業が進出していることや、年間約 100 万人が観光でタイへ行くこと、タイで製造した日本車を逆輸入していることや日本の工場向けの部品をタイから輸入していることなど、日本とタイは関係が深い。

駐在員とその家族の方を中心に、多くの日本人が生活するタイ国には、日本人が生活するには困らない環境が整っている。

先にも触れたが、タイ国は、アジアのデトロイトともいわれ、トヨタ自動車を中心に大手自動車会社が生産拠点をおいている国である。それに伴う部品メーカーも数多く進出している。

トヨタ自動車の工場を見学する機会があったが、数か所ある工場とその規模、見学を受け入れる態勢に驚いたことを覚えている。

（４）社会情勢

社会情勢については、比較的安定していると捉えることができる。何をもって平穏と捉えるかは様々であるが、ニュースや報道で入ってくる情報に比べると、一般の人々の日常は落ち着いている。クーデターが起き、臨時休業や自宅待機となったが大きなことにはならなかった。

２．バンコク日本人学校について　…平成 20 年度学校要覧をもとに記述

（１）学校名

○泰日協会学校（バンコク日本人学校）

（英語）THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL

（タイ語）　โรงเรียนสมาคมไทย-ญี่ปุ่น

（２）ステータス、設置機関等

○タイ国私立学校（日本国文部科学省海外教育施設認定校）

○設置機関　　泰日協会（会長：Staporn Kavitanon）

○運営責任者　　泰日協会学校理事会

（理 事 長）　　羽島　俊秀（泰日協会代表）

（マネージャー）　パースク・プラカスカン（タイ側代表）

（校 長）　　網田　俊二（日本国文部科学省代表）

※理事長、マネージャー、校長については、平成20年度

（３）泰日協会学校の歴史的経過とその運営

バンコク日本人学校は 『盤谷日本尋常小学校』として1926年（大正15年）に設立された。日本人学校の中で最も長い歴史を誇る学校である。

昭和20年の第二次世界大戦の終戦をもって閉鎖され、その後現地法人の熱意により、1956年（昭和31年）に日本大使館の中に「大使館付属日本語講習会」という名称で設立された。その時は幼稚園児も含めてわずかに28名、教職員は４名、岡崎熊雄領事が初代校長に就任した。

しかし、日本やタイ国の経済発展に伴い日系企業の進出に合わせて児童生徒の増加が続き、1972年（昭和47年）には在籍数が500名を超え、また当時の日華敗訴運動とも重なって日本人学校の治外法権的な存在が問題になり、正規の学校設立が急務となった。在タイ日本国大使館は、タイ国日本人会を設置者として許可を得ようとしたが、外国人法人は学校設置をすることはできなかった。

戦後復活していた日タイの友好・親善・協力団体である「泰日協会」（1935年設立）

が母体機関となって申請し、1974年（昭和49年）にタイ国私立学校法第20条１項の適用により、タイ国政府から正式に義務教育学校として認可を得ることができた。

よって、学校名が「泰日協会学校」となった。

学校の設置については、大使館を始め関係者の大変なご努力で、「日本語による日本国内に準ずる教育を・・・」という在留邦人の願いがタイ国行政機関に聞き入れられた。「母国語による教育を認める」という数少ない「特定学校」としてのご厚情をタイ政府からいただいている。

児童生徒増に伴って校地を移転するなど幾多の課題を乗り越えながら、1982年（昭和57年）にはラマ９世通りの現在地に校舎を新設し現在に至っている。

（４）学校経営

①校訓　広い心で「明るく なかよく たくましく」

この校訓は、昭和37年９月１日に制定されました。広い心でとは、いろいろな事象に対して誠実に思いやることができるという心の広さと深さをもつ人であってほしいという願いが込められており、世界のどこにあっても愛される人間の育成をする必要があることを意味している。

②教育目標 豊かな広い心を持った子どもを育てるために

（１）思いやりのある子　（徳育）

（２）創造性を発揮し、積極的に学ぶ子　（知育）

（３）心身の健康をつくる子　（健康）

（４）国際性豊かな子　（国際性）

③教育方針

○ 思いやりのある人になろう　○ 創造性を発揮し、積極的に学ぼう

○ 心身の健康を自らつくる力をもとう　○ 国際人としての基礎をつくろう

④教職員（文部科学省からは定員の８割が各在外教育施設に派遣される）

教員数105名（タイ人マネージャー１名、文部科学省派遣教員64名、
海外子女教育財団派遣教員21名、現地採用日本人教員１名、
タイ人教員５名、英会話担当外国人教員９名、タイ人水泳コーチ４名）

事務職員数10名（日本人４名、タイ人６名）、

看護婦２名（タイ人２名）

用務員17名（タイ人17名）その他警備会社から数名の警備員が常駐。

合計 134 名のスタッフで運営されている。

（５）危機管理

①下校の時刻厳守

下校のバスの出発時刻厳守が、徹底されていた。「パスポートの次に大事なことは、ゲート通過の時刻を守ること」と先輩の派遣教員から指導を受けた。

教室での帰りの会、その後の短い休み時間が終わると、小学部の全学年がゲートを目指す。担任が先頭を歩き、各学級の児童がそのあとをついて歩く。ゲートのところで児童とハイタッチをして児童を送り出す。児童は自分のマンションに向かうスクールバスを目指し分かれていく。ゲートを出たところのバスの駐車場には、100 台以上のバスが並ぶ。ゲートは、鉄製の重い扉だったように記憶している。 警備員によってゲートが大きく開けられるのは、登校時と下校時のみ。24 時間、ゲートには警備員が常駐し、すぐそばにはポリスボックス（交番）もある。警備員は、学校の敷地内に立ち入ることはあるが、校舎内に入ってくることはなかったと記憶している。バスのドライバーさんやモニターさん（添乗員、現地バス会社のスタッフ）が、学校の敷地内に入ることもない。バス会社のスタッフは、ゲートとその外にある門に囲ま

れたバス駐車場で、下校時刻まで待機している。

教職員が、学校の敷地内と外を行き来したり、何らかの理由で遅れて出勤したりする場合は、ゲートやゲート付近の警備員の待機場所で顔写真入りの身分証（名札）の提示を求められる。

では、再びバス下校の様子を記述する。

バスの乗車口には、マンション名が書かれていて、モニターさん（添乗員、現地バス会社のスタッフ）は、その日に乗る児童生徒の氏名リストをもとに、１人ずつ確認する。どのバスにだれが乗るのかをバス会社が全部把握していて、欠席の児童生徒の連絡など、詳細部分まで滞ることがないように学校とバス会社が連携を図っていた。通学バスの安全でスムーズな運航のために、校務分掌が存在した。

マンションごとのバスに間違えずに乗り、自分のマンションに帰るという当たり前のことが、時には労力を費やすこともあった。全員のバスの乗車が確認できないとバスは出発しない。

教職員が無線で連絡を取り合い、旗で合図を送り、警察も出て交通規制が整い、ようやくバスが学校を後にする。全部のバスが出ていくまでに 15 分くらいの時間がかかる。児童生徒は渋滞に込まれると１時間近くバスに乗ることもあったようだ。通学バスの発車が遅れ渋滞に巻き込まれると、帰宅時刻が遅れるため、保護者から問い合わせの電話がかかることもあった。

児童生徒の 90％が、通学バスを利用し、その費用は、保護者の負担である。バス料金の資料が残っていないので金額はわからなかったが、けっして安くはなかった。バスについては、保護者（ＰＴＡ）とバス会社の取り決めもあったようだ。

モントリー社によるスクールバス

児童生徒が、無事に何事もなく学校の行き帰りをすることは、あたり前のことだけれど、諸外国の事情によっては難しい。「ゲート通過の時刻の厳守」は、児童生徒の生命の安全に直結することだったと今でも認識している。

②緊急事態発生

派遣期間中に、タイ国内で緊急事態 が発生した。現在もタイ国の政情に、その影響が残っているのではないかと考えられる。政治的なことを書くことはできないので、緊急事態が発生し、自宅待機となったことをここには書くこととする。

深夜であったが、緊急連絡網で連絡があった。

大使館からの情報と日本国内からのニュースにより、バンコク都内の状況を知ることができたが、自宅近くはいつもと同じ日常であった。

③避難訓練や安全点検の実施、緊急一斉下校訓練

日本国内と同様に、避難訓練や安全点検を実施した。火災や地震、不審者侵入を想定した訓練は、ほぼ日本と同様に実施した。

緊急一斉下校訓練というものがあり、教職員が、通学バスに乗り込みマンションまで同乗し、目的地のマンションで児童生徒を保護者に引き渡す訓練があった。現在行われている引き渡し訓練と似ているところがある。違いがあるとすると、マンションの敷地内で引き渡すことである。この訓練は、洪水が予想される場合や交通規制が発生する場合のためのものであった。派遣期間中に、緊急一斉下校が行われることはなかったが、赴任する数年前には、交通規制があるという情報が学校に入り、緊急一斉下校が実施されたということである。

④ドライバーを雇用する

ドライバーを個人で雇い、自家用車はドライバーが運転していた。３年間の派遣期間の間、自分で車を運転することはなかった。

（６）授業のことなど

18 年度は６年生、19 年度は５年生、20 年度は６年生の担任をした。

音楽科や図画工作科、家庭科には専科教員が配置されていた。また、タイ語や英語の授業もあった。

３年目の６年担任では、社会科と体育科を受け持った。前年度から６年部は教科担任制（専科制）となっていた。中学校と同じようなスタイルで授業が進むのは、とても新鮮で、学んだこと吸収したことがたくさんあった。通知表も形式が大きく変わり、データ化された。今でこそ、通知票と要録が電子化されているが、当時としては画期的であった。

また３年目は、教材研究と生活ノート（日記）の返事、学級通信に、情熱を注いだ参観日を前にした教材研究では、中学校社会科教員のアイデアと知恵をもらい、充実した授業が展開できたように記憶している。専科の授業は新鮮なもので同じ授業を実践することができるので、授業の精度が上がっていく感覚があった。

授業参観のようす　保護者２００％

１８年度派遣教員の授業（同期派遣）

保護者の学歴も高く、教育に対する関心はものすごいものがあった。参観日の保護者の出席率は 200％で、教室に入り切れない保護者、教卓のすぐ横にまでいる保護者から熱い視線を受けながらの授業は、かなりのプレッシャーであった。もちろん授業評価もあり、下手な授業はできず、日頃の授業から積み上げていき、参観日の授業には勝負をかけるという覚悟であった。

日々の授業の経験は、その後につながったと確信している。

（７）修学旅行

６年部を２回経験したので、修学旅行の引率を２回したことになる。２泊３日でタイ国の北部チェンマイを訪問する修学旅行は、貴重な体験として残っている。

航空機を利用した修学旅行で、その旅客機は貸し切り状態であった。準備に費やすエ

ネルギーも大きいものがあった。旅行引率中も深夜まで打ち合わせをして、翌日も早朝より活動した。

現地校との交流、ぞうトレッキングなど子どもたちも貴重な異国での経験を積んでいると捉えている。

エレファントキャンプに向かう道筋で

現地校とのゲーム交流

象トレッキング

民舞の披露

組み体操披露

（８）臨海学校

５年部のときには、臨海学校を経験した。日本でいう宿泊学習と同様の行事であったと捉えている。

遠泳について、実際の距離は覚えていないが、現地スタッフや船による安全確保により、教職員の負担は軽減されていた。リゾートホテルからすぐの場所を泳ぐことや現地の医療スタッフの態勢、ツーリストポリスによる安全確保など、考え方によっては、日本の校外行事よりも手厚いサポートがあるので、教職員は児童に対する指導と支援に集中できていた。

臨海学校の学級写真

遠泳のようす

砂浜での造形活動

（９）体育的行事（大運動会）

2008 年 11 月２日には、第 53 回大運動会が実施された。運動会のスローガンは「北京につづけ！あの感動を今、ここに」であった。

全校児童･生徒数が約 2,500 人。運動会の実施で保護者も入れると 5,000 人から 6,000

人が狭い運動場に集まることとなる。練習の時も運動会当日も、限られた時間の中でいかに競技を行うかが勝負で、分厚い資料を手に分刻みで動いた。システマティックに動くためのマニュアルが引き継がれ、教員の係は３年間ほぼ固定。日本各地で運動会や部活動、各種大会を運営してきた教職員が、それぞれの役割で適材適所で働くのだから、運動会当日は、どんなことがあっても時間通りに、無事に、充実して終わっていった。

種目としては、３年間、高学年部に所属したので組体操を学級担任として指導することとなった。５，６年生合わせて約 600 人が組体操をするので、ものすごいスケールの演技であったことを覚えている。今でこそ、時代の流れで実施することのない組体操だけれども、５，６年の先生方で演技を仕上げたものだと思う。

運動会開会式。ラジオ体操

この日の日本人学校の敷地内への入場は、バスのチケットが入場券となり、なおかつ、チケットの申し込みは７月には実施。運動会のために日本から祖父母がやってくるなど、予想することができないスケールの大きさを感じた。

３．あいさつとチームワーク

（１）あいさつの大切さ

日本人がよく行くフジスーパーというスーパーがあった。土曜日や日曜日には、必ず保護者に出会う場所であった。休みの日は、デパートやショッピングモールに出かけても、観光地に行っても必ず保護者の方に出会う。

「うっちー、どこに行ってもあいさつするんやで」「あいさつだけでええんや、そうしたらなあ…」「あいさつしとったらな…」と教えられた。うまくいかないときこそ、勇気を出してあいさつをしようと考え、はつらつとした明るいあいさつを心掛けた。学級経営が行き詰まった１年目に、誰に対してもあいさつを続けることができたことは、その後の学級経営や生徒指導対応に生かされていると考えている。

（２）チームワーク

派遣年度によるまとまり（１８年度派遣なのでイチハチと呼ばれていた。）、学年部（〇年部）によるまとまりが強固で、困ったことがあると結束して行動した。また、派遣年次をこえたつながりが生まれたときには、さらに強固なつながりや結びつきができた。

修学旅行で数日間出張のとき、わが子の入浴のサポートをしてくださったのは管理職の家族であった。祖父母のサポートがない異国の地において、家族の代わりとなるあたたかいサポートは一生忘れることはできない。

管理職を中心とした学校のまとまり、学年主任による学年のまとまりなど、チームに所属することの意味を感じる場やチームにあこがれる瞬間が何度も訪れるので、チームワークは自然に高まり、チームのために心を尽くす仲間の輪が広がっていく。

チームの一員として、チームのために歯車になろうという考え方が自然に発生して

いくので、あらゆるものが高まっていった。

４．終わりに

（１）家族への感謝

在外教育施設への派遣を振り返って、一番に思うことは、家族への感謝である。家族への感謝は、同時に妻への感謝である。妻の理解、妻の支えがなかったら３年間は乗り切れなったと思う。

生まれたばかりの娘を、異国の地で育てることは、言葉にすることができないくらい大変なことだったと思う。海外での生活は、心配すること、苦労することも多かったはず。一言では言い表せないけれど、表すとすると「感謝」という言葉になる。

娘の年齢は、バンコクの地に赴任した年月とも重なる。節目を迎える度に「思い出」とともに、「感謝」も忘れずに言葉にしたいものだ。

（２）派遣されたこと（赴任したこと）への感謝

派遣されたこと（赴任したこと）に感謝したい。選んでもらえなければ、貴重な経験は積むことができなかったと考えると、そのことに関係する方々や組織、仕組や制度に感謝したい。

商社や大手企業とは異なる地方公務員の立場で、派遣（赴任）の機会をいただくことは稀だと捉えることができる。派遣されたこと（赴任したこと）が良かったと振り返ることができるのは、先輩方の功績や産業界の方々の努力もあるだろう。

いずれにしても、派遣されたこと（赴任したこと）は、「有難い」経験だったと感謝の気持ちをもちたい。

（３）感謝と縁

今回の原稿執筆にあたり、その機会をいただいたことに感謝している。

書くことにより、派遣当時のことを思い起こし振り返ることができた。時が経つにつれて忘れていくことも多いけれども、貴重な経験は、今の職務のどこかに活かされているはずである。山口県国際教育研究会に支えてもらっていることを感じずにはいられない。感謝したい。

また、派遣前、派遣当時（赴任当時）、帰国後に共に過ごした仲間に感謝したい。派遣年次が違っても、国や地域が違っても、その時その場所で過ごした縁は、何かあるのだろう。支え支えられ、これからも続く職務の中で、人とのつながりを素敵な縁ととらえ、大事にしていきたい。

（４）次回の執筆では

次回の執筆では、チェンマイ補習校に派遣されたときのこと、現地資料をもとにした社会科の授業実践、専科による授業実践の記録、生活ノートのこと、研究組織等について記憶をたよりにして執筆したいと考えている。